

女川原子力発電所における防潮堤かさ上げについて（概要）

1. 津波評価について

敷地に大きな影響を与えると想定される津波として、3つのタイプの地震に起因する津波を選定した（図1）。

各地震について基準断層モデルを設定し、耐津波設計上の十分な余裕を確保するために、最新の知見に基づき津波水位に及ぼす影響が大きいと考えられる波源特性の不確かさを考慮した多数の数値シミュレーションを実施した（図2）。

上記評価の結果、防潮堤に到達する津波の最大遡上水位がO.P.約+23mとなった（図3）。

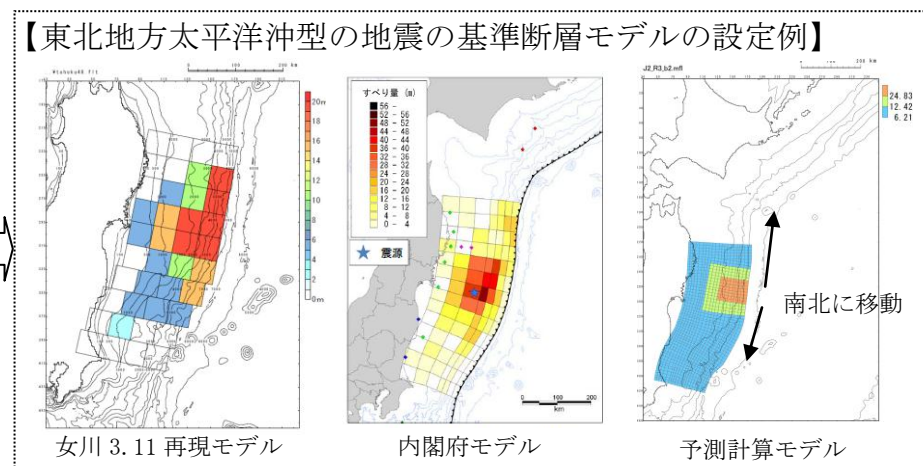
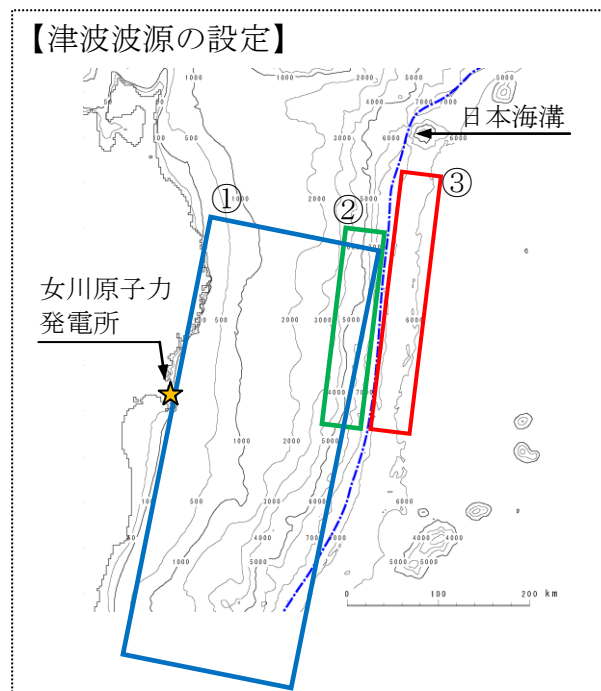


図2：基準断層モデルの設定例

波源特性の不確かさの考慮

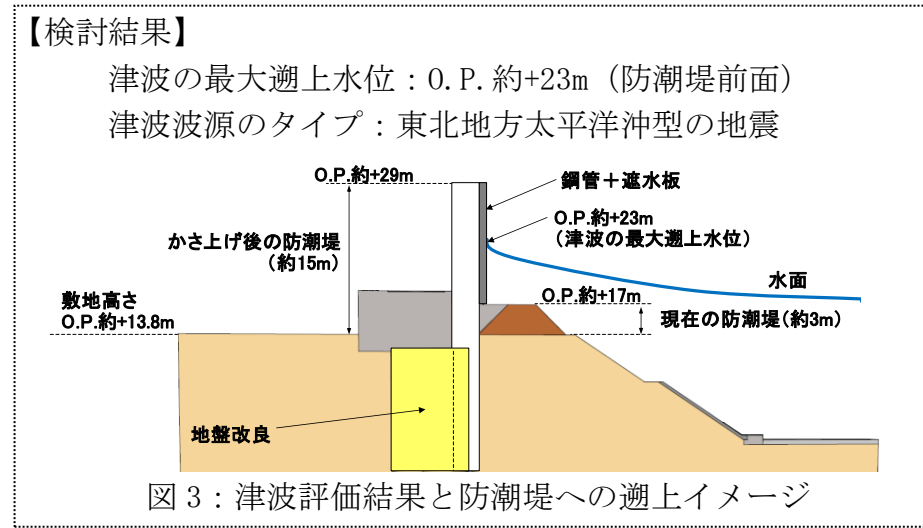


図3：津波評価結果と防潮堤への遡上イメージ

検討対象とした津波波源 (主な既往津波)	Mw
① 東北地方太平洋沖型の地震 (3.11地震)	約9.0
② 津波地震 (1896年明治三陸地震津波)	8.3
③ 海洋プレート内地震 (1933年昭和三陸地震津波)	8.6

図1：検討対象とした津波波源

2. 防潮堤かさ上げについて

津波評価結果を踏まえ、より安全性を高め、地域の皆さまにご安心いただく観点から、自主的な対策として、防潮堤を現在の高さ約3m（O.P.約+17m）から約15m（O.P.約+29m）にかさ上げすることとした（図4、図5）。

かさ上げ後の防潮堤は、鋼管式鉛直壁（約680m）とセメント改良土による堤防（約120m）により構成され、総延長は約800m（現在約600m）になる。

なお、防潮堤のかさ上げについては平成28年3月の完了を目途に進めていくとともに、今後も引き続き、最新知見の収集に努め、適切な対策を実施することによって、発電所のさらなる安全性の向上に取り組んでいく。

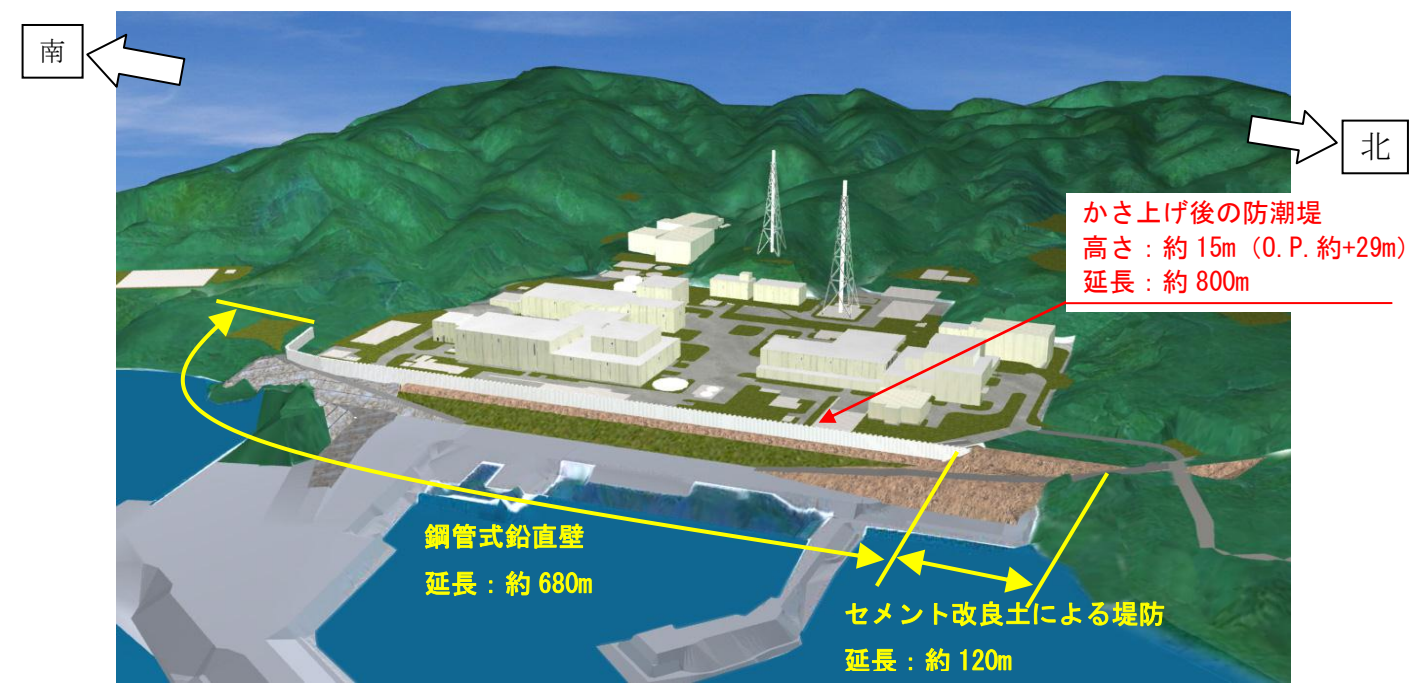


図4：完成予想図

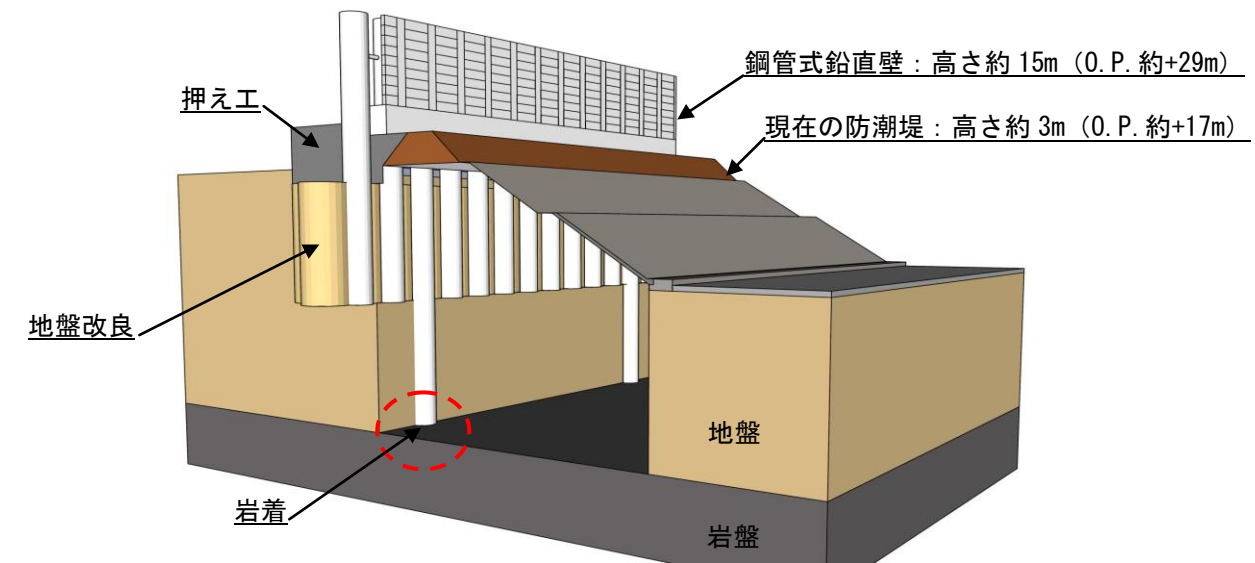


図5：防潮堤の基本構造図（鋼管式鉛直壁）